

2015年7月30日(木) 5校目

上演5

鳥取県 米子高等学校

「学習図鑑」

見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品」

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

松下 夏実 (奈良市立一条高等学校)

宍戸 菜々恵 (岩手県立盛岡第三高等学校)

中澤 伸之 (高知県立高知小津高等学校)

不思議な魅力を持っている劇であった。観た者それぞれに非常に多様な感想を抱かせ、もう一度見たくなる深い余韻を残していた。

舞台にはすべて真っ白なガレージの壁と、その中央に一点映える赤い扉。その周りには椅子でもあり、組み合わせて机にも見立てられるシンプルな白い箱が数個置かれていた。この箱により飽きの来ない場面転換になっていた。役者が大道具の壁を乗り越えて後ろから登場することで、テンポよく芝居が進められていた。また、主人公の小学生・山田くんのセリフに合わせて壁の後ろから大きなガイコツが飛び出してきて、彼の脳内が可視化された演出には大変驚かされた。

山田くんは、母が家を出て行き、父と二人で暮らしている。父はそれまで、あまり家庭を顧みていなかったためか、息子の山田くんを「キミ」と呼び敬語で話す。少しぎこちない親子関係に見えた。そんな山田くんの小学校での出来事や、おじいさんになるまでの様子を描いていた。彼自身も周りの人々も大変個性が強く、時に声を出して笑ってしまった。

劇中、何度か水の音が聞こえ、後半ではホースで見立てられたへその緒が登場し、山田くんのいるガレージがまるで母親のお腹の中のように想像させた。また、ラストシーンでは、ずっと閉ざされていた赤い扉が開き、その奥から客席に向かって照明が当てられ、山田くんが光に向かって歩いて行くかのような演出がなされていた。これは、命の「誕生」を象徴しているのだろうか、もしくは山田くんの不安からの「再出発」を表しているのだろうか。非常に想像力をかきたてられる場面であった。

もしかすると、この劇自体が「子供の考えている世界」なのではないかという意見があった。カエルの解剖をするシーン、クラスで飼っていたウサギが死んだことを問題とするシーン、手術でも行うかのようにサンマを捌くシーンなどが、次々に描かれていく様子は、まるでぐちゃぐちゃした子どもの頭の中のようにも感じられた。これらのシーンに共通していたのは「命」を扱っているということであった。コミカルに演出されていたために、くすっと笑ったが、同時に子ども独特の残酷さも感じられた。私たちが小学生であった頃を思い返すと、この無邪気な残酷さも腑に落ちた。

笑えるが考えさせられる「おもしろい」劇で、いくら言葉を足しても足りないような深みがあった。

